

## 青く舞うもの

「ユリアさん、どうかしましたか？」

「……え、あ、いや、なんでもありません殿下」

「……」

クローゼは目の前に立つユリアをみる。アルセイユがリベルリアークに不時着して丸一日。休みもせず陣頭指揮をとっている彼女。疲労を口に出すことはないが、顔に疲れが出ている。

「ユリアさん、休んでください。ラッセル博士によれば後は起動実験の準備のみですので、技術者さんたちに任せておいて大丈夫です」

「しかし殿下」

「お休みなさい。これは命令です。休める時に休む。非常事態の鉄則です」

「……わかりました」

納得できないといった表情だが命令と言われれば仕方がない。おとなしく艦橋から出ていった。

「ふう。ユリアさんも強情ですから。本当は命令、なんて言いたくなかったんですけどね」

「しゃーないですわ、あの人ホンマカタブツですし。でもお姫さん、いいタイミングでした。そろそろ限界来とるはず。お姫さん言いださへんかったらオレが強制催眠かけてでも休ませようおもたんですが」

「そうですね。彼女があそこまで疲労を外に出すのは初めてです」

「まーしかたねーんじゃないかな。俺たちみたいな徹夜が友の人間ですら、今の状態はきついてもんがある」

ラッセルからの報告を持ってきたケビンと、取材を兼ねてあちこち歩いているナイアルがうんうんと頷く。

「とにかく、時間はないですがそれに追われてこちらが参ってしまうのはもつといけないことです。じっくり、休みながら、一歩ずつ動くしかありません」

「さっき聞いたがエステルたちもそんな感じで動いているらしい」

「エステルさんたちが戻っているのですか？」

「ああ。甲板で会った。あの空賊の娘を迎えにきたとかなんとか……。グロリアスを見つけたそうだ」

「へえ。そーいや空賊のメンバーが捕まってる言うてたな。だからあのお嬢さん迎えにきたんか。エステルちゃんらしいわ」

お人よしやなあとケビンが笑う。確かに、とナイアルもクローゼもつられて笑った。

「あれえユリアさん。どうしたんですかあ？」

少し間延びした声でドロシーがユリアに声をかけた。

「ドロシー殿……。いや、殿下に休息を取れと言われてしまった」

「そうなんですかあ。うん、休める時に休んだ方がいいですよ。いろんな修繕もだいぶん終わりに近づいているみたいだし」

「そのようだなによりです。無茶な命令をしてみましたとは思いますが、皆それに応えてくれた。いい部下や協力者に恵まれ、自分は感謝しています」

「いい指揮者さんだから、みんないい働きできるんですよ。ニコニコと笑うドロシーの言葉に照れ、少し顔が赤くなる。

「あつ、ユリアさん顔が赤くなった！ これはシャッターチャンス！」

「ドロシー殿、戯れはおやめ下さい」

慌ててファインダーから逃げようとしていたところ、騒がしいので何事かと食堂から出てきたシエラザードにぶつかる。

「あつ、申し訳ない！」

「構わないわ。けどどうしたの？」

「それはですねえ、こういうわけなんです。ドロシーがうれしそうに事の顛末を話す。

「あらあら、あたしもみたかったなあ」

「シエラザード殿！」

「いいじゃないユリアさん。一つも表情変わらないような上司、あたしだったら嫌よ」

「……」

「シエラさんもこういつていることだし、ほらほらもつと笑って笑って」

ドロシーの写真攻撃が始まる。だが、急に笑えと言われても笑えるものではないし、そもそも最初と趣旨が変わってきているような気がする。

「ドロシー殿、自分は休みますのでこれにて！」

少し慌ててその場を辞した。後に残されたドロシーとシエラザードが何かを言っているが、休まなければならぬので聞こえなかつたふりをする。

とはいえ、他の休憩者たちもいるし、艦内のにぎやかさからエステルたちが戻っていることもわかつた。

「とりあえず……静かなところへ行きたい」

アルセイユの不時着地点は公園区画ということは聞いていたので、少し外の風に当たろうと思ひ甲板に出た。ツァイス中央工房の技術者たちと遊撃士、部下たちが飛び散つ

た破片を集め修復作業をしているのが見える。大きな体のジンが軽々と大きな破片を運ぶのに見とれていたが、時折ものすごい音が聞こえてくるので、ここでは心が落ち着かないともう少し足を進めてみることにした。

別の区画から流れ込んでくる滝の音がすごいが、人の話し声ほど気にならない。人工の滝だが水が立てる音は自然の音だ。ユリアはそんな水辺に立っていた。

公園区画というのが、細かく分けられた区域がずっと続いていく、そういった場所のようだ。一つ一つはそれほど大きくない。

「あれは……エレベーター？」

レールハイロウというものに乗れるという駅が遥か頭上にあると報告にあった。そこまでいけばどこまでこの公園区画が続いているかわかるだろう。だが、仕切っている壁に上る道を見つけたので、そちらの方を選んだ。あまりアールセイユから離れるわけにはいかない。

壁の上からの景色は絶景だった。水が太陽に煌き、光を乱反射するそばには緑。千二百年も前に命として生きはじめた植物たちは、今でもまだ変わらず生きている。だが。

「人間たちは、この街で死んでいた」

何も考えずとも望んだものが手に入る都市。人間以外のものは生き生きと暮らしたが、人間だけは。だから、この都市を捨て、地上に降りたのだ。

「……」  
この街に未だ漂う死の気配。それは自分が人間であるから感じるのだろうか。みればジークは幸せそうに宙を舞っている。

ふと思ひ立ち、ユリアは剣を抜いた。この街で死の気配に巻き取られていった人たちの為に。それでも力強く生きる動植物の為に。自分は何ができるだろうと考えたのが、剣舞だ。東方から仕官しにきていた部下から、供養や鎮魂の踊りで剣を使ったものがあると聞いていた。興味を惹かれたので調べ、また剣舞を舞える踊り子のところへ習いに行つたのだつた。

「久しぶりだから、上手く舞えるか……」

少し壁の上を歩き、どちらに落ちても水に落ちる位置へ移動する。剣を構え目を閉じる。

「……はっ！」

短い気合とともに体が動く。流れるような動作で足を進め、剣の先までが自分自身であるような錯覚。自分が身近にしている剣術とはまるで違う動き。斬る為の動き。だが、自発的に相手を傷つけるものではない動き。

無駄に大きな動きはない。それほど広くはない壁の上でユリアは舞う。今回の一連の騒ぎで傷つき、倒れ、逝つた者たちを悼みながら。戦争をする人間である自分が争いで死んだ人間を悼むのはどうなのだろうと、自重も込めて。